

私は上海を3回訪れたことがある。第1回は1979年（昭和54年）政府訪中団の一員として、北京・上海・蘇州を訪れた。第2回目は2004年（平成16年）中国の弁理士事務所の社員旅行に同行して、上海・桂林を旅行した。第3回目は理科大の上海同窓会を設立するイベントに参加するために2012年（平成24年）上海・蘇州・無錫を訪問した。三十数年の間の中国の変遷ぶりを検証してみたい。

【1979年の北京】

第1回は、田中角栄元首相が日中国交回復を成功させた1972年（昭和47年）から7年後の1979年4月であった。当時中国では、発明者証という共産主義国家独特の発明奨励制度があったが、先進国の特許制度はなかった。中国政府は特許制度を立ち上げるために、日本に対して特許制度の専門家の派遣を要請してきた。その要請に応えるために、日本特許庁長官を団長とする特許関係専門家よりなる訪中代表団が中国に派遣された。当時、私は（財）日本特許情報センター（Japatic: 現 Japio）で特許情報検索システムの開発を担当していたので、この訪中代表団の一員として、北京、上海の中国関係部署、主として中国国家科学技術委員会の研究所を訪問した。当時、日本では中国の国内事情は余り知られていなかった。初めて社会主義国を訪問するので、常に秘密警察に付きまといられて行動の自由も余りないのではないかと内心びくびくものであったが、現地についてみると、極めて友好的で、一般市民も日本人に対して敵意を持ったり、差別をしたりすることは全く見られなかった。

最初は北京に滞在したが、宿泊した北京飯店では夜になると電力事情のため廊下の照明は蛍の光状態、すぐ傍にある北京の銀座と云われている王府井は人影もまばらで、国営百貨店と云われる小さな店先には煙草と僅かな日用品が売られているだけでお客は全く見当たらない。外国人に対しては、友誼賓館と称する立派な土産物店が用意されていて、そこではあらゆる商品が入手できる。中国人は立ち入り禁止で、彼らは塀の外から羨ましそうに覗いていた。



1979年北京飯店の窓から見た、当時の北京市街。右は王府井通りと思われる。

街を歩く市民は男女とも黒に近い無地の国民服で、化粧している女性はまず見受けられない。街は非常に清潔で紙屑一つ落ちていない。この裏を返せば、極度に紙が不足しているので新聞は全て壁新聞、紙くずや木くずは全て燃料として拾われてしまうので、街には全くゴミが見当たらない。犬や猫も全く見受けられない。現地の人に聞いてみると「犬猫は必要ない」との答え。答えの意味がよくわからなかったが、犬猫に与えるエサがなくて飼えないか、すべて食べてしまったのではないか。



壁新聞をむさぼり読む大衆



バスの切符購入のため群がっている市民

交通機関は長距離は汽車、近距離はバスか自転車。北京には地下鉄は既に開通していた。自動車はあるが殆どが外国からの輸入の中古車。国産の乗用車としては「紅旗」が有名でこれは要人用。一般車としてはカロークラスの「大陸」があった。我々訪中団の一行も、万里の長城に案内された時、1人1台ずつ「大陸」車が割り当てられた。運転席には丸いスピードメータが一つだけついた極めてシンプルな車体で、皆長城に向かう坂道でエンストを起し、ノンストップで長城にたどり着いたのは8台中私の乗った車だけであった。



地下鉄の入口、当時やっと一般市民に解放された 要人用の国産車「紅旗」
バックのビルは北京ダックの本店

中国側は、我々を北京郊外にある工作機械の工場に案内してくれた。それは最新式の数値制御の工作機械を製造している工場で、工場自体も党の表彰を受けている優良企業である。しかし、同行した民間メーカーの訪中団の一人が、

工作機械の台の固定に脚の下に石ころを詰めていることを目ざとく見つけて教えてくれた。



北京近郊の工作機械の工場



自慢の数値制御の工作機械



個人赤旗成績表 ギア旋盤グループ
任務／品質／設備／安全



旋盤を操作する女子工員

【1979年の上海・蘇州】

我々一行は約1週間北京に滞在した後、飛行機で上海に向かった。上海では錦江飯店に宿泊した。錦江飯店は英国租界時代に建てられた高級ホテルで、その庭内にある六角形の低層マンションが我々の宿舎として充てられた。

このマンションは各階ごとにダイニングルーム、居間、書斎、台所に寝室2と浴室2を備えた豪勢なもので、上級者はワンフロア全部、我々下級者はワンフロアに2名ずつ宿泊した。



当時の錦江飯店のステッカー



Japatic(現 Japio)の機械検索の説明

各部屋にはボーイが一人 1 日中待機しているが、なにも頼むこともないので気の毒になり、翌日、偶々私は中国側に日本における特許情報の現状を説明する事になっていたので、説明用の図面を書くための大きなケント紙と筆記具を頼むと喜んで調達してくれた。

さて、当時の上海は昔の租界時代の雰囲気の色濃く残っていた。ホテルから見渡すと低階層のレンガ色をした建物が遥か彼方まで続いている。その中に一際高い当時のテレビ塔が見られる。



錦江飯店の窓から望む三十数年前上海市街 遙かにテレビ塔が見える

当時の街中の古いビルの礎石に日本の会社の名前が書かれたものもあった。錦江飯店から車で 10 分程の所に「上海ブルース」の歌で懐かしいガーデンブリッジ（外白渡橋）がある。この橋は 1907 年に建設された中国最古の鉄橋で、黄浦江の支流である蘇州河に架かり、英国租界のあったバンド（外灘）と戦前の日本人居住区の虹口地区を結んでいる。

この橋から当時上海で 1, 2 の高さを誇った上海大廈が眺望できた。上海大廈は 1934 年に建設され、当時は Broadway Mansions Hotel と呼ばれ、中国内戦で国民党が最後まで立て籠もって抵抗した歴史的な建物である。

街角は人民服の親子ずれでにぎわっていた。北京に比べると人民服でも多少赤みがかかった服装でおしゃれをしている。町には、映画館の他娯楽施設もほとんどなく、商店もほとんど商品を置いていないが、揚げパン屋の前には長蛇の行列ができていた。



ガーデンブリッジと上海大廈



上海の市街地 北京に比べてカラフル



揚げパン屋の前の行列



果物屋のある通り

上海滞在中中国側は我々一行を蘇州に案内してくれた。上海駅の構内には1カ所だけネオンが取り付けられていた。当時の中国としては非常に珍しいものであった。

蘇州までは汽車で移動。軟席車のテーブルには白のシートがかけられボーイがウーロン茶をサービスしてくれる。



軟席車



上海駅



**蘇州駅にて
党幹部が歓迎してくれた**



蘇州の住宅地

蘇州では獅子林、寒山寺等を訪れた。獅子林の公園では親子連れの来園者が多く、昼時は鼻の入っていない真っ白な大きな万頭を頬ばっていた。若者は何れも日本製の二眼レフを胸にかけている。これが当時の最高のトレンド。

街角で見かけた女の兵隊さんが一番おしゃれであった。



獅子林園内の親子ずれ



二眼レフを手に持つ地元の女の子



獅子林



可愛らしい女の兵隊さん

中国側は或る日、蘇州名物のうちわ（蘇扇）を作る工場を案内してくれた。工場は旧財閥の屋敷を接収したもので、部屋には当時の調度品がそのまま飾られていた。若い女の工員さんが手造りで扇子の製造、絵付けをしていた。



扇子工場で製造工程を説明する党幹部



扇子工場的女子工員

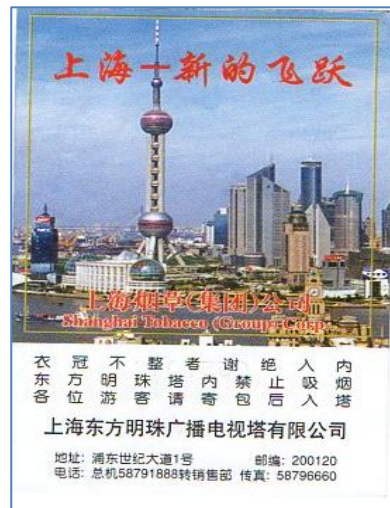
【2004年の上海】

2004年の10月、中国の弁理士事務所の社員旅行に誘われて、上海、桂林を訪れた。25年ぶりに訪れた上海は驚くほど変貌していた。25年前の静かで質素な上海の面影はどこにもない。高層ビルがそびえ、商品が溢れた街には人々が忙しく行き交っている。夜にはネオンが輝き、雑踏と喧噪はまさに東洋一の繁華街である。

ある日、当時東洋一を誇ったテレビ塔、東方明珠塔 468m を見物した。展望台からは雨後の竹の子のようによきよきと聳え立つ高層ビルが眼下に見える。しかし、展望台の中は群衆でごった返している。押し合いへし合いしながら大声で携帯電話をかける人の声で話も出来ない位だ。今の中国人は礼儀を全く知らない。行列はしない。平気で割り込んでくる。ぶつかっても絶対に謝らない。街中で2回交通事故を目撃した。自動車がこすれ合った程度のものだが、運転手同士が延々と大声で罵り合っている。根負けした方が負けだ。大体中年の女性が勝つ。君子の国中国はどこに行ったのか。



東方明珠テレビ塔と鉛筆のように尖った金茂大廈



テレビ塔のチケット

上海空港に向かう時にリニアモーターカーに乗った。上海の中心街龍陽路駅と上海浦東国際空港との間約 30 キロを 7 分間で走る。最高速度はなんと 430km/h！驚きのスピードである。しかし、客車は意外にも質素であった。



リニアモーターカー



リニアモーターカーの乗車券

【2012年の上海・蘇州・無錫】

あれから8年たった2012年3月に理科大の友人に誘われて上海・蘇州を訪れた。2010年に万博を開催した上海は一段と華やかさを増していた。

我々一行は先ず蘇州を訪れた。浦東国際空港からバスで2時間半、目的の姑蘇錦江大飯店に着いたときは既に夜中の12時を廻っていた。



姑蘇錦江大飯店



蘇州の住宅地は30年前と余り変わっていない

【無錫】

翌9日、朝早くから、太湖遊覧のため観光バスで隣町の無錫に向かう。蘇州から無錫まで約1時間。沿道には広野の中にあちらこちら、高層住宅団地が点在する。10~20個同じタイプの高層ビルが聳える団地の手前にはカラフルな屋根をした1戸建ての住宅が30~40戸程整然と並んでいる。まだ、建設中の団地も多く、屋上に大型のクレーンが据え付けられた高層ビル群が幾つも見られた。蘇州近郊は高層ビルの建設の真っ最中である。



高層住宅団地



建設中の高層住宅ビル群

無錫では三国志のテーマパーク三国城に立ち寄る。これは中国中央テレビがテレビドラマ「三国演義（三国志）」の撮影に使用したオープンセットで、35万平米の広大な敷地の中に、テレビ撮影用に作られた山城、城門、呉や曹操の水軍基地、呉の王宮、赤壁の戦いの特撮池、魏呉蜀の英雄の騎馬像等が配置

されている。呂布の城壁の前の広場では張飛、関羽、劉備の三英雄の騎馬武者と呂府の騎馬隊とが実戦さながらに争う騎馬戦が見物用に実演されていた。



三国志城門



魏呉蜀の英雄の騎馬像



三英雄 VS 呂府の騎馬戦

呉の水軍基地からそれぞれ三国志にちなんだ名前が付けられた遊覧船に乗り太湖を周遊する。



呉の王宮



太湖遊覧の戦艦



三国志の英雄の名前が付けられている

【蘇州】 昼食後、蘇州の名園留園にバスで向かう。

留園は清時代の個人庭園で世界遺産に登録されている。池の後ろに聳える石は太湖でとれた太湖石で、「冠雲峰」と呼ばれている。女性はガイドの李さん。日本語歴わずか4年でぺらぺら、中国の風習等も教えてくれた。夜は蘇州の運河を遊覧船で周遊。沿岸の建物は美しくライトアップされ旅情を誘う。



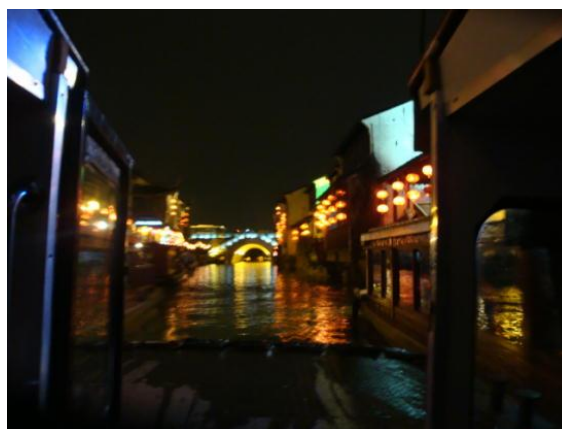
留園の太湖石とガイドさん



留園で記念撮影



蘇州の運河



ライトアップされた民家と石橋

翌日10日は寒山寺を訪れる。日本人、中国人の団体客で賑わっていた。寒山寺の屏や建物は中国では最も尊い色とされている黄色で塗られている。



寒山寺前の参道



寒山寺の入り口

三十数年前に訪れた時は鐘楼の鐘を撞かせてくれたが、意外に小さいのに驚いた記憶がある。右の石碑は、有名な漢詩「月落烏啼霜滿天…」のレプリカ。本物は館内に展示されているがかすれて殆ど見えない状態。



鐘楼



月落烏啼霜滿天の石碑

【ロク直鎮】

昼からロク直の運河を遊覧する。

ロク直は蘇州の郊外にある宗明時代の古い石橋が多数残された水郷で、沿岸の民家も明清時代の面影を残し、現代風に建て替えるのが禁止されている。四人ずつ小舟に乗ってクリークを周遊する。女船頭さんが哀愁のある歌を歌ってくれる。兩岸の写真屋さんではウエディングドレスを着て記念写真を撮るカップルで賑わっていた。昼は、ロク直市内の小さな食堂で地元中華料理を食べる。店は汚いが、最初に出された骨付き豚足の味は最高であった。



ロク直の運河を行き交う小舟



櫂を操りながら歌ってくれる女船頭

【上海】 ロク直からバスで上海に移動。約1時間半。市内に着くと先ず、新天地を訪れる。ここは昔のフランス租界の跡で、小さな広場に噴水があり、路地の両側にはレトロ調の食堂や喫茶店が続く。



新天地の広場の噴水



外人客で賑あう新天地の路地

夕方近く宿舎の花園飯店（オークラガーデンホテル）に辿り着く。早速旅装を解き、夕食は四川料理をいただく。



花園飯店の窓から見渡す上海の高層ビル群



花園飯店の玄関

夜は数百人乗れる大型の観光船で黄浦江のナイトクルージング。沿岸の建物は全てライトアップされている。



ライトアップされたテレビ塔



7年間に比べると右端の森ビルが新設

7年前に来たときは上の写真の右から2番目の先の尖った金茂ビル(93階、420m)が中国で一番高いビルであったが、今では右端の通称、上海森ビル(上海環球金融中心ビル:101階、492m)が一番になった。森ビルはトップに四角い孔が開いているので非常に目立つ。当所は丸い孔をあける予定であったが、日の丸を連想するとの理由で反対され四角に変わったとの説もある。上海ではさらに高いビルが建設中である。2014年竣工予定の上海センタービルで118階632m、現在世界一の台北のTAIPEI101(508m)を抜いて世界一になる予定。しかし、森ビルの入居率は未だに50%程度、中国の不動産のバブルもそろそろはじける寸前であるとの噂を耳にした。

11日午前中は自由時間。私は三十数年前に見たガーデンブリッジと錦江飯店の中にあつて我々が泊まった六角形のホテルを探すためにホテルを出た。地下鉄で行くつもりであったがホテルの係の人の忠告でタクシーで行くことにした。ところがタクシーの運転手は日本語も英語も通じない。止むを得ず紙に「外白渡橋」と書くと分かったとばかり飛ばしてそのそばに来た。橋の手前で止めさせ、「待」と紙に書きタクシーを降りて写真を撮る。



ガーデンブリッジと後方の上海大廈



外白渡橋のネームプレート

そもそも『外白渡橋』とは「外人は無料(白の意味)で渡れる橋」との意味で、租界時代は中国人は渡ってはいけない橋とされてきた。このような屈辱的な名前を未だに平然と使っている中国人の神経が分からない。上海大廈については最初にその謂われを説明したが、橋もビルも三十数年前と全く変わらない風情をしていた。

ここに来たもう一つの目的は、ここからテレビ塔等のある新開地の写真を撮るためであった。ところが今日は晴れにも関わらず霧でテレビ塔はかすかに見えるだけである。歌にも歌われている「霧の都の上海」ということをすっかり忘れていた。写真は昨日夕方撮った写真(上掲)で我慢することにした。

次の目的は私の泊まった六角形のビルの探索である。タクシーの運転手に「錦江飯店」と紙に書いて示すと分かったと頷いて街の中心地に向かう。錦江飯店

は我々の宿泊している花園飯店のすぐ向かい側にあった。まず、ホテル本館・北樓の玄関に横付けさせ、ドアボーイに日本語か英語のできる人を連れてくるように頼むと、支配人らしい人が出てきて英語で対応してくれた。

「私は30数年前このホテルの庭にあった六角形のビルに泊まったことがあるので、記念のために写真を撮らせてくれ」と来意を告げると、すぐそばにある煉瓦色のビルを指さし、そのビルであり、峻岭ビルといって一時はホテルを営業していたが今ではブティックに貸してあるとのこと。

私の記憶では、数個の六角形の独立したビルが並んで建っていたような気がしたが、今では、3個の六角形のビルを低いビルで連結して一体になっている。ビルの中にはいくつかのブティックが入っていた。ビルのプレートに記載されているように『峻岭公寓』(Former Grosvenor House : Monument under the Protection of Shanghai Municipality)は、当所は外人用アパートとして1935年建設された Grosvenor Gardens のことで、現在は上海市の重要文化財となっている。



左が峻岭ビル、右が錦江飯店本館



峻岭ビルのプレート



正面から見た峻岭ビル



花園飯店の窓から見た六角形の峻岭ビル

三十数年前に宿泊したホテルは幸運にも今回宿泊したオークラガーデンホテルの筋向いで案外簡単に見つかり記念写真を撮ってその目的を達した。

その後は、繁華街の南京西路の静安寺周辺を探索した。

地下鉄2号線の静安寺駅周辺は、三国志時代に建立された名刹静安寺を中心にして高層のオフィスビルが林立する繁華街。この駅の裏側に、戦前中国で唯一の国際的な社交場として東洋一を誇った豪華なダンスホールといわれた百楽門舞厅(Paramount Ballroom)があった。戦後は休業していたが、現在はダンスホールとして営業を再開している。



静安寺とその周辺の高層ビル群



百楽門舞厅（昔東洋一のダンスホール）

街を行く人々は男女何れもダウンジャケットにズボン。地下鉄の構内にあるスーパー、スイーツの販売店、洒落れたコーヒーショップ。東京の風景と余り変わらない。縦横に高速道路が作られているせいか自動車の渋滞も余り見られない。自動車の騒音もさほどひどくない。昔の様にやたらに警笛を鳴らすこともない。衣食足りて礼節を知る。人も車も静かになった。

ただ、電動の小型バイクが歩道まで乗り込み、ものすごい音の警笛を鳴らして人をかき分けて行くのは相変わらずである。上海市内では、物乞いや押し売りは殆ど見られなくなった。しかし、若い男女をターゲットに執拗にセールスするキャッチガールがあちらこちらに出没していた。我々外人には見向きもしない。何をセールスしているのか。

久しぶりに来た上海は、かつての喧噪さは余り見られなくなっていた。人も車も街の佇まいも東京と余り変わらなくなった。そのせいか却って今まで抱いていた上海に対するロマンが何となく薄れて行くような気がした。



2012年3月20日
代表弁理士 川島 順
はやぶさ国際特許事務所